

資料

医療福祉系学生の文章表現に関する意識調査

根来麻子^{*1} 宮川健^{*2}

1. 緒言

文章を書く力は、口頭によるコミュニケーション力と併せて、大学生の必須能力のひとつとして重要視されている。平成16年2月に出された文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」では、必要となる国語力のひとつとして「書く力」が挙げられ、「自分の考えや意見などを正確に伝える論理的な文章を書くことができる」「伝統的な形式や書式に従った手紙や通信などの文章を書くことができる」「様々な情報を収集して、それに基づいて明確な文章を書くことができる」という三点が、具体的な目標として掲げられている¹⁾。

平成20年に公表された中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」では、大学における初年次教育が定位され、その中で習得すべきもののひとつとして「レポート・論文などの文章技法」が挙げられている²⁾。文部科学省の調査によれば、初年次教育を実施している大学は年々増加傾向にあり、平成26年の段階で96.1%となった。その中で、基礎的な文章力の育成に関するプログラムを実施している大学は、86.2%に上る³⁾。

川崎医療福祉大学では、平成26年度より、それまで選択科目であった「文章表現」が一年次必修科目となった。その目的は、実習ノートの記入や授業におけるレポートの作成などの基礎的な「書く力」の向上、および、卒業論文執筆や国家試験・就職試験における小論文作成を見通した、医療福祉人としての論理的な文章作成能力の育成である。筆者を含む「文章表現」授業担当者は、小論文やレポートの書き方、敬語の使い方・手紙の書き方など、大学生として必須とされる項目の習得を目標に、オリジナルテキスト『大学生のための文章表現テキストブック』（内藤康裕・根来麻子編、平成26年発行、平成27年

改訂）を用いて授業運営を開始した。

ただ、必修化に伴い、文章を書くことが苦手な学生や、文章を書くことへの興味が薄い学生も当該科目を履修することになったため、学生の学習意欲や基礎学力に差のある可能性が懸念された。学生の意欲や基礎学力の実態を把握することは、学習効果の上がる授業内容や授業方法を検討する上で必要不可欠である。しかし、ひとクラスの受講人数が50人～120名と大規模であり、授業時間内だけでは学生一人一人の実態を把握することは困難であった。

そこで、文章を書くことに関する学生の意識や経験の実態を明らかにするため、アンケート調査を実施した。本研究は、そこから得られた知見をもとに、今後の授業改善に向けた課題を見出すことを目的とする。

2. 方法

2.1 調査対象

川崎医療福祉大学の平成27年度必修科目「文章表現」の受講者である1年生と2年生のうち、調査の趣旨に賛同した809名を調査対象とした。

2.2 調査実施時期

調査実施期日は、平成27年4月と9月の初回授業時である。

2.3 調査方法

無記名のマークシート式アンケート用紙による。

2.4 調査内容

以下の項目についてアンケートを行った。

- (1)「文章を書くことは好きですか」という質問項目について、「好き」「どちらかというと好き」「どちらかというと嫌い」「嫌い」の4件法で回答を求めた。
- (2) (1)で「どちらかというと嫌い」「嫌い」を選んだ者に対し、「その理由を次から選んでください」

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 子ども医療福祉学科／総合教育センター

*2 川崎医療福祉大学 医療技術学部 健康体育学科／総合教育センター

（連絡先）根来麻子 〒710-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

E-mail : a.negoro@mw.kawasaki-m.ac.jp

という質問項目を設け、複数回答可として回答を求めた。選択肢は「書きたいことがない／何を書けばいいのか分からない」「書きたいことはあるが、言葉がうまく出てこない／うまく書けない」「文章の組み立て方が分からない」「文と文とをうまくつなげられない」「課題に興味がわからない」「書き出しが分からない」「最後のまとめ方が分からない」「文字を書くことが面倒だ」の8項目である。

(3)「比較的書きやすいのはどんなものですか」という質問項目について、複数回答可として回答を求めた。選択肢は、「親しい人への手紙」「自分だけが読む日記」「ブログやSNSへの投稿」「自由な作文」「日誌などの記録文」の5項目である。

(4)「これまでに、小論文などの『文章表現』に関する授業や指導を受けたことがありますか」という質問項目について、「ある」「ない」の2件法で回答を求めた。

(5)(4)で「ある」を選んだ者に対し、「どこで学んだか次から選んでください」という質問項目を設け、複数回答可として回答を求めた。選択肢は「高校の授業」「高校の個別指導」「塾や予備校の授業」「塾や予備校の個別指導」「家庭教師による個別指導」の5項目である。

(6)「『文章表現』を受講して、どのようなことができるようになりたいですか」という質問項目について、複数回答可として回答を求めた。選択肢は「大学でのレポートが書けるようになりたい」「社会人としての常識や文章力を身につけたい」「実習ノートが書けるようになりたい」「就職活動の時の小論文が書けるようになりたい」「特にない」の5項目である。

(7)「『文章表現』の授業で、具体的に学びたいことは何ですか」という質問項目に対し、複数回答可として回答を求めた。選択肢は「文章の組み立て方」「読みやすい文章の書き方」「手紙の書き方」「書き出し・まとめの書き方」「敬語の使い方」「慣用句」「漢字」「原稿用紙の使い方」「特にない」の9項目である。

(8)「授業形態について、あなたが望ましいと思うものを次から1つ選んでください」という質問項目について、「講義が主」「講義＋個人演習（問題演習や作業）」「講義＋グループ演習（問題演習やディスカッションなど）」「個人演習やグループ演習が主」の4件法で回答を求めた。

2.5 倫理的配慮

アンケート回答者には、「研究対象者への説明文書」を配布し、(1)研究の意義（背景および目的）、(2)研究対象者に依頼する事項、(3)個人情報の保護の方法、(4)研究協力への同意・不同意、及び回答

内容による不利益への配慮、(5)研究実施責任者の氏名・職名、連絡先、について伝達・説明した。その上で、趣旨に同意した者にのみ回答を求めた。回収は、回収箱を教室の机上に設置し、退室時に提出させた。

2.6 検定方法

文章作成への好悪意識と、高校までに文章指導を受けた経験の有無との関連性については、クロス集計を行い、カイ二乗検定を用いて分析した。有意水準5%未満をもって有意とした。統計分析は、アンケート用集計ソフトウェアであるQA-Navi2（有料版）を用いた。

3. 結果

3.1 文章作成への好悪意識（質問項目(1)）

有効回答者数806名のうち、文章を書くことが「好き」と答えた学生は6.1%（49名）、「どちらかという」と好き」と答えた学生は28.2%（227名）、「どちらかという」と嫌い」と答えた学生は45.9%（370名）、「嫌い」と答えた学生は19.9%（160名）であった（図1）。また、学部別にみると、医療福祉学部（有効回答者数281名）では、「好き」が7.8%（22名）、「どちらかという」と好き」が32.0%（90名）、「どちらかという」と嫌い」が44.1%（124名）、「嫌い」が16.0%（45名）である。医療技術学部（有効回答者数385名）では、「好き」が5.2%（20名）、「どちらかという」と好き」が28.3%（109名）、「どちらかという」と嫌い」が44.4%（171名）、「嫌い」が22.1%（85名）である。医療福祉マネジメント学部（有効回答者数140名）では、「好き」が5.0%（7名）、「どちらかという」と好き」が20.0%（28名）、「どちらかという」と嫌い」が53.6%（75名）、「嫌い」が21.4%（30名）である。「好き」「どちらかという」と好き」を合計した割合を比較すると、一番パーセンテージが高かった医療福祉学部（39.9%）と医療福祉マネジメント学部（25.0%）では、14.9%の差があった。

3.2 文章作成が「どちらかという」と嫌い」「嫌い」と感じる理由（質問項目(2)）

(1)で「どちらかという」と嫌い」「嫌い」を選択した回答者530名のうち、「書きたいことがない／何を書けばいいのか分からない」を選択した学生が413名（77.9%）、「書きたいことはあるが、言葉がうまく出てこない／うまく書けない」が265名（50.0%）、「文章の組み立て方が分からない」が240名（45.3%）、「書き出しが分からない」が218名（41.1%）、「最後のまとめ方が分からない」が161名（30.4%）、「文と文とをうまくつなげられない」が141名（26.6%）、「文字を書くことが面倒だ」が116名（21.9%）、「課題に

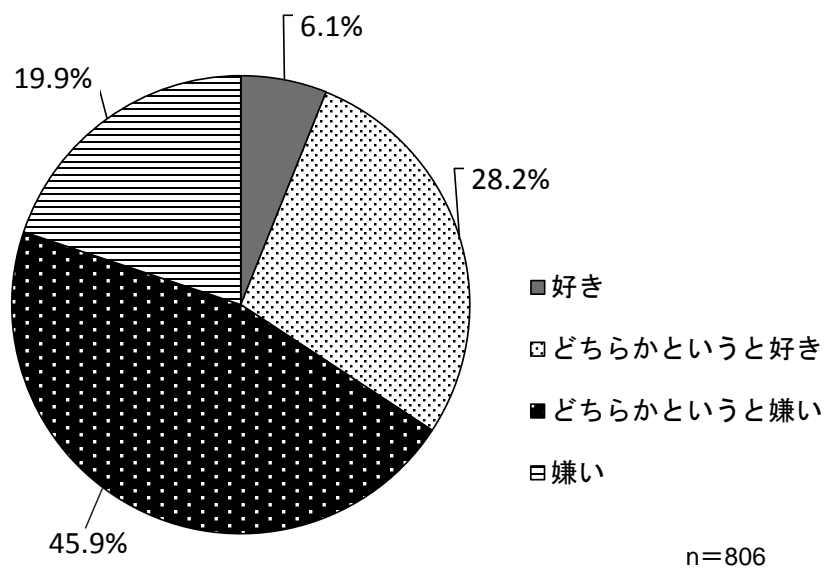


図1 質問項目(1)「文章を書くことは好きですか」への回答結果

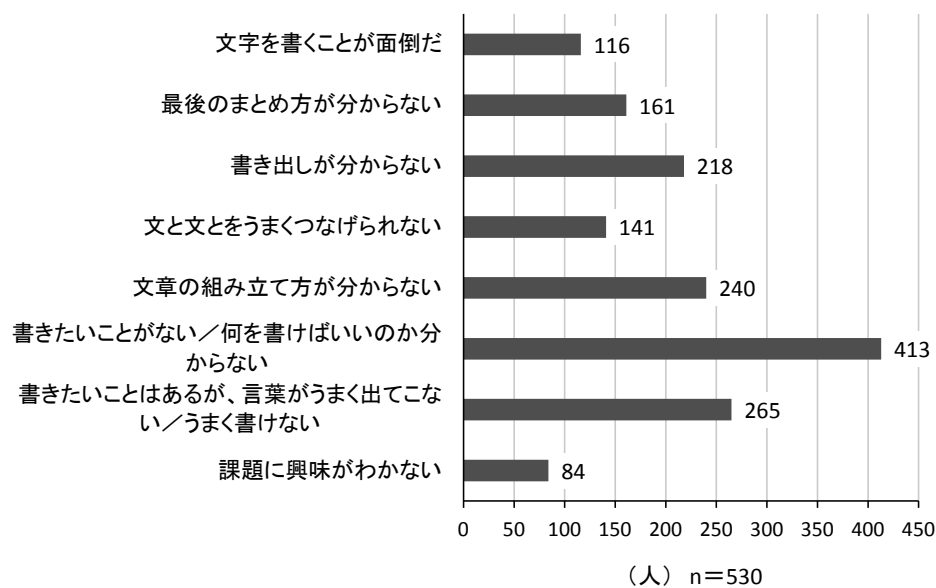


図2 ((1)で「どちらかという嫌い」「嫌い」を選んだ人に対して) 質問項目(2)「その理由を次から選んで下さい」(複数回答可)への回答結果

興味がない」が84名(15.8%)であった(図2)。

3.3 比較的書きやすいと感じる文章ジャンル(質問項目(3))

有効回答者数798名のうち、「親しい人への手紙」を選択した学生が590名(73.9%),「自分だけが読む日記」が321名(40.2%),「ブログやSNSへの投稿」

が297名(37.2%),「自由な作文」が263名(33.0%),「日誌などの記録文」が147名(18.4%)であった(図3)。

3.4 高校までに文章作成に関する指導を受けた経験の有無(質問項目(4))

有効回答者数804名のうち、「ある」を選択した学生が80.0%(643名),「ない」が20.0%(161名)であっ

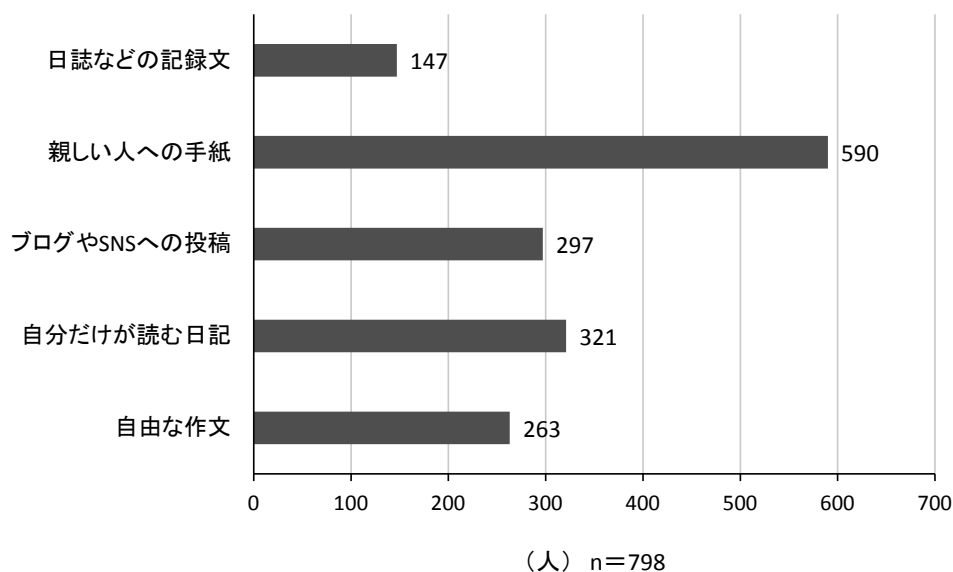


図3 質問項目(3)「比較的書きやすいのはどんなものですか」(複数回答可)への回答結果

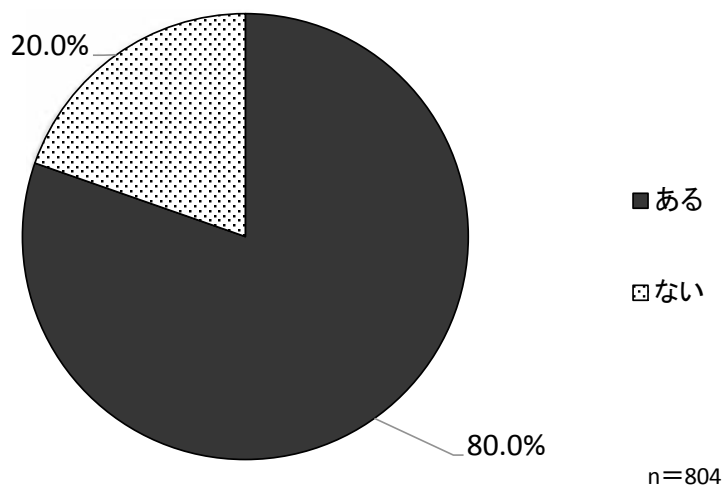


図4 質問項目(4)「これまでに、小論文などの『文章表現』に関する授業や指導を受けたことがありますか」への回答結果

た(図4)。学部別にみると、医療福祉学部(有効回答者数281名)では、「ある」が82.9%(233名)、「ない」が17.1%(48名)、医療技術学部(有効回答者数385名)では、「ある」が80.8%(311名)、「ない」が19.2%(74名)、医療福祉マネジメント学部(有効回答者数138名)では、「ある」が73.9%(102名)、「ない」が26.1%(36名)であった。

3.5 文章作成に関する指導を受けた場所(質問項目(5))

(4)で「ある」を選択した回答者643名のうち、「高校の授業」を選択した学生が466名(72.1%)、「高校の個別指導」が205名(31.7%)、「塾や予備校の授業」が37名(5.7%)、「塾や予備校の個別指導」が23名(3.6%)、「家庭教師による個別指導」が3名(0.5%)であった(図5)。

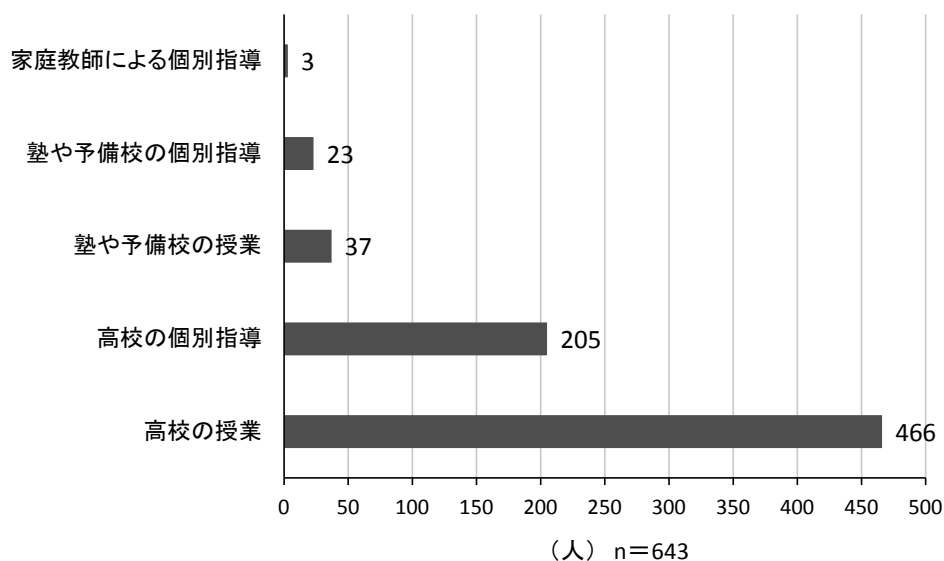


図5 (4で「ある」と答えた人に対して) 質問項目(5)「どこで学んだか次から選んでください」(複数回答可)への回答結果

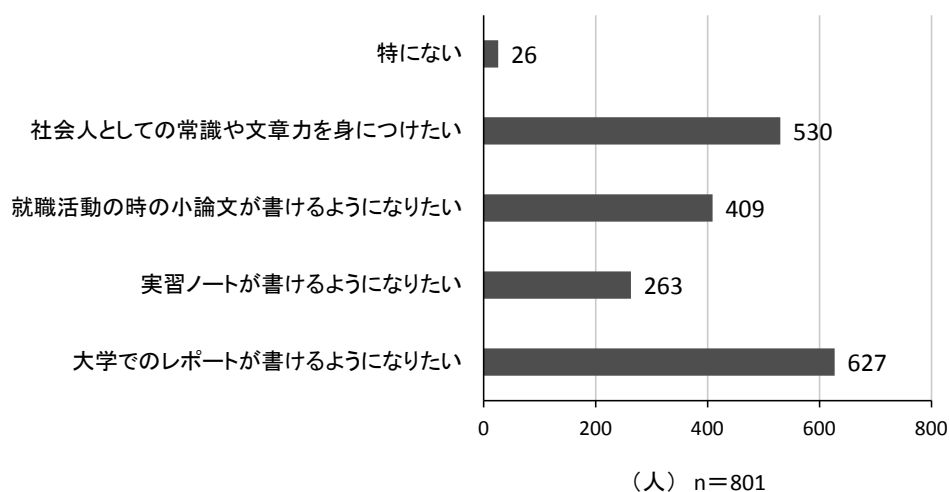


図6 質問項目(6)「『文章表現』を受講して、どのようなことができるようになりたいですか」(複数回答可)への回答結果

3.6 「文章表現」を通して身につけたいこと (質問項目(6))

有効回答者数801名のうち、「大学でのレポートが書けるようになりたい」を選択した学生が627名(78.3%),「社会人としての常識や文章力を身につけたい」が530名(66.2%),「就職活動の時の小論文が書けるようになりたい」が409名(51.1%),「実習ノートが書けるようになりたい」が263名(32.8%),「特にない」が26名(3.2%)であった(図6)。

3.7 「文章表現」を受講して具体的に学びたいこと (質問項目(7))

有効回答者数808名のうち、「手紙の書き方」が635名(78.6%),「文章の組み立て方」を選択した学生が569名(70.4%),「書き出し・まとめの書き方」が479名(59.3%),「読みやすい文章の書き方」が463名(57.3%),「敬語の使い方」が282名(34.9%),「漢字」が172名(21.3%),「慣用句」が165名(20.4%),「原稿用紙の使い方」が102名(12.6%),「特にない」

が13名(1.6%)であった(図7)。

3.8 好ましいと思う授業形態(質問項目(8))

有効回答者数791名のうち、「講義が主」を選んだ学生が29.8%(236名),「講義+個人演習(問題演習や作業)」が42.1%(333名),「講義+グループ演習(問題演習やディスカッションなど)」が22.5%(178名),「個人演習やグループ演習が主」が5.6%(44名)であった(図8)。

3.9 文章作成への好悪意識と、高校までに指導を受けた経験の有無との関連性

文章作成への好悪意識(質問項目(1))と、高校

までに文章作成に関する指導を受けた経験の有無(質問項目(4))とのクロス集計を行った。学習経験が「ある」と答えた者のうち、36.7%(236名)は文章を書くことが「好き」「どちらかというが好き」と答えている(図9)。検定の結果は、0.1%水準で有意であった($\chi^2(3)=17.39$, $p<0.001$)。残差分析の結果、指導を受けた経験のある者のほうが、「好き」「どちらかというが好き」と答えた割合が高く、反対に、指導を受けた経験がない者は、「どちらかという嫌い」「嫌い」と答えた割合が高かった。

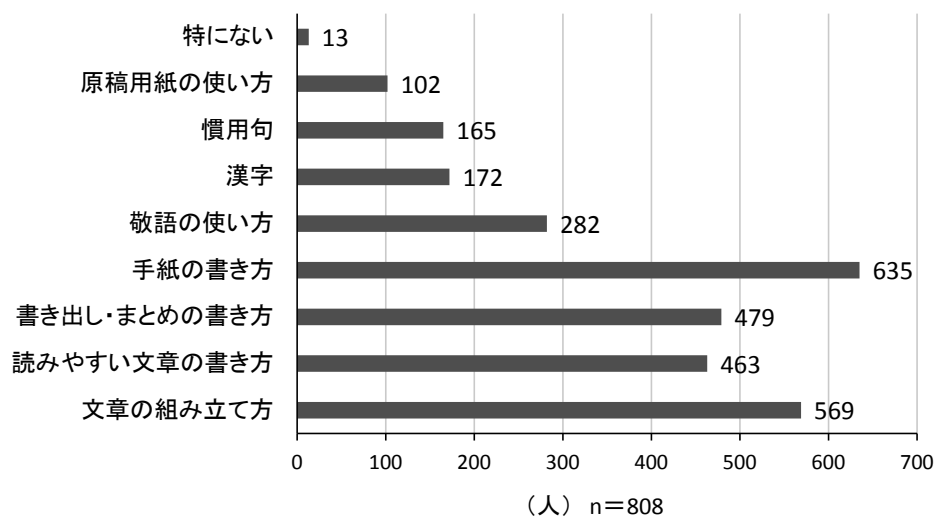


図7 質問項目(7)「『文章表現』の授業で、具体的に学びたいことは何ですか」への回答結果

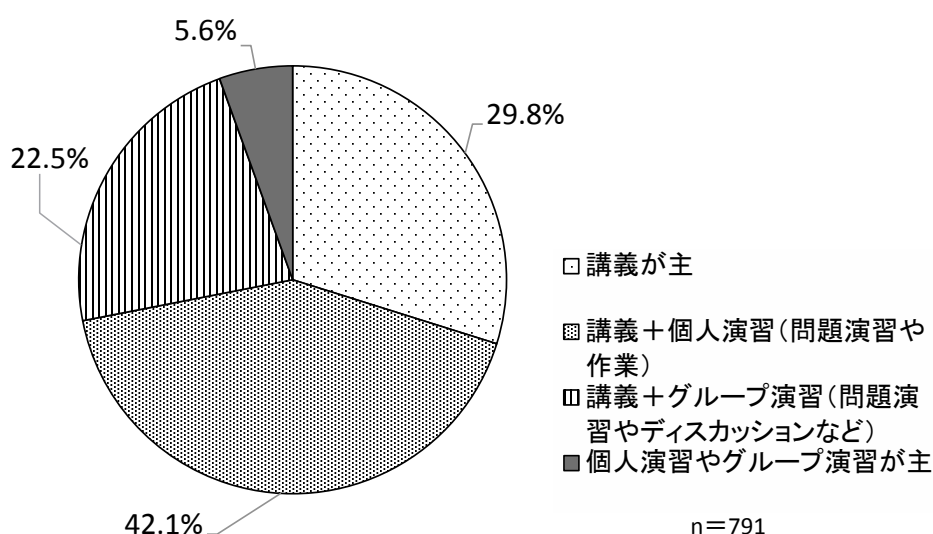


図8 質問項目(8)「授業形態について、あなたが望ましいと思うものを次から1つ選んでください」への回答結果

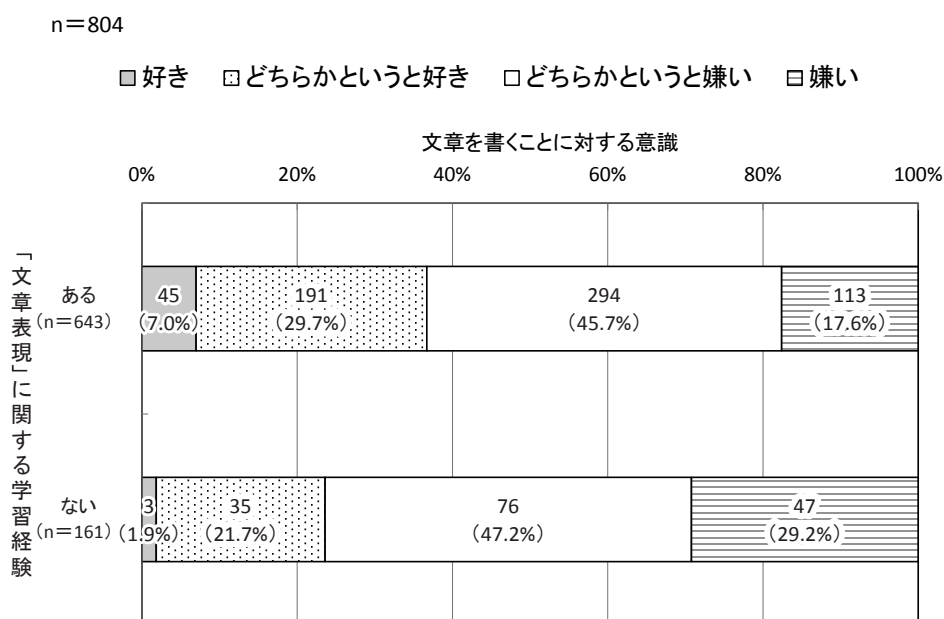


図9 「文章表現」に関する学習経験と、文章を書くことに対する意識との関係

4. 考察

4.1 文章作成への意識

まず、質問項目(1)の結果より、学生の約66%が、文章を書くことについて「嫌い」「どちらかという嫌い」と感じていることが分かった。学部別の集計では、医療福祉学部で、文章作成への嫌悪感が全体の結果に比べ、若干低いことが分かる。また、医療福祉学部と医療福祉マネジメント学部で14.9%の開きがあり、学部・学科の志向と文章作成に対する意識の差が認められる。なお、渡辺が国立の総合大学三大学の初年次生1018名を対象として、入学直後の4～6月に行った意識調査⁴⁾では、「私は書くことが苦手だ」について「どちらかといえばそう思う」「そう思う」と回答した学生が、大学ごとに61%・54%・49%となっている。文章を書くことへの嫌悪・苦手意識は、本学のほうが強い傾向にあるといえる。

「嫌い」「どちらかという嫌い」を選択した理由については、質問項目(2)の結果より、「書きたいことがない／何を書けばいいのか分からない」を選択した学生が、回答者全体の77.9%と最も多かった。次いで多かった「書きたいことはあるが、言葉がうまく出てこない／うまく書けない」が50.0%であり、30%近くの差があることから、学生が文章作成を「嫌い」と感じる背景には、「書く」という行為そのものよりも、「書く内容」にまずつまづきがあることが分かる。前掲の渡辺の調査において、レポートや小論文を書く場合に苦勞する（大きな労力や時間を

費やす、心理的な抵抗や負担を感じる）ステップについて調査した結果⁴⁾によれば、「書き始めるまで」および「書き始める」段階で苦勞すると答えた人が、約6割に上ったという。また、近田が同一項目について行った調査⁵⁾でも、76.6%（95人）が「書き始めるまで」および「書き始める」段階で苦勞すると答えたという報告がなされている。

また、書く内容以外では、文章の構成を考慮することへの苦手意識が見て取れた。「嫌い」を選択した理由で3・4番目に多かったのが、「文章の組み立て方が分からない」（45.3%）「書き出しが分からない」（41.1%）である。文の組み立てについては、質問項目(7)「『文章表現』の授業で具体的に学びたいことは何ですか」において二番目に回答が多かった（70.4%）選択肢でもある。たとえ書きたいことがあっても、それをどのような順序で書くか組み立てないまま書き始めたり、組み立てることに不慣れであったりすれば、書いている途中で頓挫しかねない。「途中で何を書いているか分からなくなってしまう」「書き出しやまとめ方が分からない」という声は普段の授業内でもよく耳にするが、それもまた、事前に組み立てを十分に考えて書き出さないことによって生じる行き詰まりであろう。前掲した渡辺の調査⁴⁾では、書いている段階での主訴として、「途中で止まる、規定の文字数に達しない」「何を書いているかわからない、書くことがない」というコメントが挙がったとある。調査対象となった大学の偏差値や、

学部ごとの違いは考慮すべきであるが、大学初年次生の大まかな傾向として、書く内容を熟考・整理しないまま書くことによって行き詰まるという経験により、文章を書くことを「嫌い」と認識してしまう実態がうかがえる。渡辺は、「構想にあまり労力をかけずに書き始め、やがて行き詰まり、推敲に至るよりも前の段階で文字数の増加(文章の引き伸ばし)に腐心するという『苦手』者たちの姿が想像される」とした上で、「以上の分析結果から得られる実践的な示唆は、『苦手』者たちに構想の大切さを説き、構想の仕方を指導することの必要性だろう。(中略)書き始める前に十分に書く材料を揃えて適切に配置すること、すなわち構想を練ることをこそ、まずは強調すべきだろう」と指摘している⁴⁾。実際に筆者も、授業内で小論文やレポートの組み立てを指導し、ある程度“型”を意識した上で文章作成に取り組ませたところ、大半の学生が600字～1200字以上の筋道の通った文章を作成することができている。文章を書くための基本的なステップとして、書くべき内容と構成を考えるという事前準備をより入念に行うよう指導すれば、文章を書くことに対する嫌悪感や負担感を幾らかは払拭できることが期待される。

4.2 「文章表現」に関する学習経験

質問項目(4)の結果によると、高校までに文章表現に関する授業や指導を受けたことがある学生は8割に上った。質問項目(5)で、どこで指導を受けたかを問うたところ、「高校の授業」「高校の個別指導」がほとんどであり、「塾や予備校の授業」は全回答者数の5.7%、「塾や予備校の個別指導」は3.6%、「家庭教師による個別指導」は0.5%にとどまった。高校において文章指導を受けた経験を持つ学生が多いのは、大学入試で小論文が課されることに伴い、小論文指導を授業内に組み込む高校や、個別指導で対応している高校が大半であるからだろう⁶⁾。確かに、3.9の結果に基づけば、指導を受けた経験のある者は、ない者に比べ、文章作成が「好き」「どちらかというところ好き」と答えた比率は高い。しかしながら、それでも、指導を受けた学生の6割以上が苦手意識を持っている。文章表現に関する授業や指導を受けた経験が、必ずしも文章作成への意欲や積極的な態度に結びついていない点は気がかりである。「書けるようになる」にはまず、「書く」「読む」も含む」という営為に慣れ、抵抗感をなくすことが必要だろう。そのためには、最初から長文作成を目標とするのではなく、ゲーム感覚で取り組める短文作成のワークなど、平易な課題を導入として取り入れるのも有効である。

また、レポートの書き方については高校では学ぶ

ことが少なく、大学入学後、「レポートとは何か」「何をどのように書けばよいのか」について戸惑う学生は多いという⁷⁾。一方、渡辺と島田は、高校の教科書にはレポートの教示があるものの、高校と大学とで教わるレポートの定義が異なるために、学生の困惑の一因となっているのではないかと指摘している⁸⁾。現在も「レポートの書き方」に関する指導は行っているが、レポートと小論文との差異をより明確にした上で、卒業論文の執筆をも視野に入れた指導を行う必要があるだろう。

4.3 授業形態に関する意識

平成24年の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」⁹⁾において、従来の知識注入型授業から、問題解決型の「能動的学修(アクティブ・ラーニング)への転換」が求められたことを契機として、現在大学において、グループワークやディスカッションなどを中心とした学修形態が推奨されている。文章表現系授業においても、他者との協働による「学び合い」「教え合い」が一定の効果をもたらす学習方法のひとつである¹⁰⁾ことは言を俟たない。しかし、学生の意識としては、講義形式や個人演習を好ましく思う割合が依然として高いといえる。質問項目(8)の結果によれば、望ましい授業形態として「講義が主」を選んだ学生が29.8%、「講義+個人演習(問題演習や作業)」が42.1%で、併せて7割を超えた。ベネッセ教育総合研究所の2016年の調査では、演習型授業より、講義型授業が好ましいと回答した大学生が8割弱であったという¹¹⁾。また、近田と杉野の神戸大学での調査¹²⁾によれば、大学教育における学修形態に上記のような潮流があるにもかかわらず、「アクティブラーニング型授業」が必ずしも学生に肯定的に受け入れられているわけではない実態が明らかにされている。その理由として上位に上がっているのが、人と話すことが「苦手」「恥ずかしい」などコミュニケーション上の問題と、「疲れる」「面倒くさい」などの意欲上の問題であった。本学において、好ましい授業形態として、「講義」と「講義+個人演習」に回答が集中したのも、おそらくこれらの理由が背景にあるのだろう。とはいえ、「文章表現」という科目の性質上、実際に手を動かして文章を作成したり、他者の文章を読んで批評したり、他者と意見交換をして思考を深めたりするプロセスは不可欠である。また、将来医療福祉職に就く学生にとって、起こった事実や自分の考えを正確に伝える技術はもちろんのこと、他者と対話・協働する姿勢を身につけることは、ことのほか重要である。学習者に負担感を抱かせず、グループ学習や協働学習を効果的に行うた

めには、クラスの雰囲気や、学習者の適性などに対する細やかな配慮が必要であろう。また同時に、他者と意見交換をしたり、自分の書いた文章に対して他者からコメントを受けたりする相互行為が、結果的に文章力の向上につながるということを、より積極的に説くことも肝要である。

5. おわりに

今回のアンケート調査で明らかになったのは、主に以下の三点である。

- 1) 高校までに文章を書くことに関する指導を受けた経験があっても、文章を書くことに対して否定的な意識を持っている学生が大半であった。
- 2) 1) のように感じる要因の多くは、書く内容を考える段階でのつまずきや、文章の組み立てにおける行き詰まりなど、実際に書く以前の段階におけるものであることが分かった。
- 3) 文章表現の学習にも効果的であると考えられるグループ学習型授業について、望ましくないと考える学生が多いことが分かった。

大学生活においては、各科目で課されるレポートや実習報告書など、まとまった文章を書く機会は少なからずある。また就職活動では、エントリーシートや志望理由書、小論文などを書かなければならない。そして何より、実際に医療福祉の現場で働くにあたっては、記録や申し送り、報告書やメールの作成など、否応なく文章を書く機会に直面することになる。本学における「文章表現」必修化の目的も、そういった様々な「書く」場面において、学生がまずくことなく文章作成に取り組めるよう後押しするためであった。よって目下の課題は、文章を書くことに対する否定的な意識を、授業を通していかにして払拭するかであると考ええる。「書けた」という成功体験を一度でも多く経験し、それに伴う達成感を味わうことは、「書く」ことへの嫌悪感・負担感

の軽減につながるであろう。

そのためには、①「書く」以前の段階におけるつまずきを解消すること、②グループワークなどの協働学習への意欲を高め、そこから得られる学習効果を体感させること、の2点が挙げられるだろう。平成28年度の「文章表現」の授業からは、「書く」以前の思考法として、課題発見・問題解決のプロセスをグループワークによって体験させ、その後、小論文のアウトラインを作成する取り組みを行っている。論理的な文章の柱となる「問題提起」（課題発見）をグループワークで考えることによって、学習者それぞれに異なる視点や発想がグループ内で共有され、学習意欲の向上につながっている。また、平成29年度の授業では、小論文やレポートの下書きをパーツごと（序論・本論前半部・本論後半部・結論）に作成し、その都度グループで「読み合い」を実施している。他者の目に触れることを意識して文章を書く習慣を身につけるとともに、他者の文章を読むことによって、自己の文章を相対化する効果も期待できる。他学においても、文章表現系授業において、文章の構成を考えるパラグラフ・ライティングを協働学習によって行う試みと成果が報告されている¹³⁾。「書く」以前の準備・構成段階に重点を置く指導と、有効な協働学習方法の模索に、今後も継続して取り組んでいきたい。

なお、平成28年度より、学生への個別対応がより細やかに行えるよう、クラスサイズを縮小した。それまで基本的に1学科1クラス（クラス人数50名～120名）であったところを、学科の中でさらに2～3クラスに分割し、現在は1クラス最大でも40名強のクラスサイズで運営している。クラスサイズが小さくなったことで、担当教員が学生1人1人と対話できる機会が増えるとともに、学生の意見や発言をクラス内全員で共有し、そこから新たな気づきを得ることも可能になっていることを付言しておきたい。

謝 辞

本研究で用いたアンケート用紙は、調査実施当時ご在職であった内藤康裕先生（本学元教授）と共同で作成したものです。アンケート調査の実施にあたっては、授業担当の内藤先生、橋本美香先生（川崎医科大学准教授）にご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。また、本研究のアンケート調査の回答者としてご協力頂きました学生の皆様にお礼申し上げます。

文 献

- 1) 文部科学省文化審議会：これからの時代に求められる国語力について（答申）.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/bunka/toushin/04020301.htm, 2004. (2017.9.25確認)
- 2) 文部科学省中央教育審議会：学士課程教育の構築に向けて（答申）.
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf, 2008. (2017.9.25確認)
- 3) 文部科学省：平成26年度の大学における教育内容等の改革状況について（概要）.
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_icsFiles/afieldfile/2017/02/17/1380019_1.pdf, 2016. (2017.9.25確認)
- 4) 渡辺哲司：「書くのが苦手」をみきわめる—大学新入生の文章表現力向上をめざして—. 学術出版会，東京，2010.
- 5) 近田政博：「学術論文の書き方入門」の授業実践—文章作成に対する学生の苦手意識は軽減できるか—. 名古屋高等教育研究，(13)，103-122，2013.
- 6) 長岡裕子：小論文指導の制度的確立に向けて—「高校教養科」設立の提唱—. 国語教育思想研究，(3)，29-38，2011.
- 7) 椎名渉子，湯浅千映子：神奈川大学初年次必修科目「文章表現法」指導の方向性—文章表現に関する意識調査から—. 神奈川大学国際経営論集，(49)，129-140，2015.
- 8) 渡辺哲司，島田康行：ライティングの高大接続—高校・大学で「書くこと」を教える人たちへ—. ひつじ書房，東京，2017.
- 9) 文部科学省中央教育審議会：新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて—生涯学び続け，主体的に考える力を育成する大学へ—（答申）.
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf, 2012. (2017.9.25確認)
- 10) エリザベス・パークレイ，パトリシア・クロス，クレア・メジャー著，安永悟監訳：協同学習の技法—大学教育の手引き—. ナカニシヤ出版，京都，2009.
- 11) ベネッセ教育総合研究所：第3回大学生の学習・生活実態調査報告書ダイジェスト版 [2016年].
http://berd.benesse.jp/up_images/research/3_daigaku-gakushu-seikatsu_all.pdf, 2017.
 (2018.1.31確認)
- 12) 近田政博，杉野竜美：アクティブラーニング型授業に対する大学生の認識—神戸大学での調査結果から—. 大学教育研究，(23)，1-19，2015.
- 13) 荻原桂子，宮本和典：アクティブラーニング—文章作成の技法—. 九州女子大学紀要，52(2)，15-29，2016.

(平成30年1月31日受理)

A Survey of Attitudes toward Academic Writing among Students Learning in the Course of Medical Welfare

Asako NEGORO and Takeshi MIYAKAWA

(Accepted Jan. 31, 2018)

Key words : writing, class improvement, university students

Correspondence to : Asako NEGORO

Department of Medical Welfare for Children

Faculty of Health and Welfare

Kawasaki University of Medical Welfare

Kurashiki, 701-0193, Japan

E-mail : a.negoro@mw.kawasaki-m.ac.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.27, No.2, 2018 563 – 573)

